

## 生涯学習の日常化をめざして

— 年報第10号の発刊にさいして—

岡 本 包 治

日本生涯教育学会は、いまや10歳に達した。そしてこの10年間に社会をめぐる諸状況にも大きな変化が見られる。この変化の中で特に注目すべきことは、社会の急激な学習社会化ということであろう。日々に変り行く生活や文化に追いつくための学習。平均寿命の伸長、高齢化にともなう人生設計と活動のための学習。働くことを中心にしてきた人生を、余暇も含めた「楽しさ」や「遊び」に拡大して、生涯の豊かさを求める学習など、社会の諸側面において現代人にとって学習という行為が比重を高めつつある。いやそれは常態化し、肉体化しつつあるといってもよいのかも知れない。

したがってまた、現代人のこうした変化に対応し、その学習行動を援助するための諸活動が社会の中に展開されて来たことはいままでもない。さらに学習欲求への単なる対応に止まらず、学習行動への動機づけも展開されてきたのである。こうした学習行動とそれへの諸援助を現時点で概観し、今後の方向性と発展性を洞察することがきわめて大切な仕事になっているといつてよい。本書が『生涯学習社会の総合診断』を名乗るゆえんである。

現在の生涯学習社会をより深化、発展させて行くために必要な諸条件は多々存在する。それらの中から若干の事項をとりあげてみたい。

その第一は、学習諸条件のネット・ワーク化ということである。

## ii 巻頭言

現代人の学習行動に応えるための機会や施設などは現時点でなお不足していることは事実であり、その面での生涯学習基盤の整備は急務を要することはいうまでもない。しかし反面、既存の学習諸条件を「つなぐ」ことがきわめて不十分な状況であることは認めざるを得ないのではないか。高齢者の学習活動を例にすれば、福祉領域の方で行なわれている学習機会の設定と、教育委員会の側で展開される学習機会とには、必ずしもネット・ワーク化が前提とされていない場合が多いのである。だから同一の高齢者が福祉・教育の両領域の学習機会で同一の学習内容に接することもめずらしくない。しかも両領域の学習機会に参加している高齢者が、地域の高齢者の中の一部の層に限定されているという現実も存在する。学習機会設定の調整、学習内容の調整、学習者層の拡大という面での両者のネット・ワーク化が進められれば、事態は大きく変容するはずである。同じようなことは施設についても論及できるはずである。青少年施設と高齢者施設のネット・ワーク化は常識化したと考えるとよいのではないか。

第二は、生涯学習的風土の形成ということである。

現代人の生活は徐々に学習的に変化しつつあるという実態が、このことを裏づける。一例をあげよう。ある町では経済的効率を高めるために道路沿いの小川にフタをして道路を拡幅して活用していた。いま、この町では再びフタを撤去して小川を復活させ、さらに莫大な費用を投じて、そこにホテルの復元をはかったのである。社会投資としては非常識かもしれないが、学習的基盤づくりとしてはきわめて有意義なものであるとその町の首長は断言した。小川にホテルを求める住民の生活意識の変化に支えられてこそその施策である。住民の心のやすらぎと青少年の情操育成を意図した「生涯学習風土づくり」なのである。いうまでもないが、この施策の担当部局は教育委員会ではない。環境整備という首長部局である。つまり行政の諸部局の本来的業務が、いま生涯学習援助という視座から、そのあり方が問い直されているのである。現代行政がハードからソフトにきりかえられつつあるという話しは神話ではない。「生涯学習のまち」づくりが行政全部局

のテーマであり、それが「住みよいまち」をつくり出す総合的施策だとされるのも、こうした理由に他ならない。

第三は、住民による、総資源の総活用ということである。

生涯学習の推進には、地域の人材登録とか人材活用ということが常態的に論じられている。この面での指導者やボランティアの主体的活動は当然ながら不可欠なことではある。しかし、住民によるあらゆる資源の総活用というものを強く意識したいものである。それは、指導者とかボランティアと名づけられない住民の主体的活動であり、人材に限定しない社会諸資源の活用である。

特定の能力を持たないただの住民が、自らの人間関係を生かして、知人の所持する空気を開放させて、子ども会の活動の場として活用する行い。日ごろPTAに協力しない夫をそそのかして、PTA広報づくりに一役を演じさせる妻。婦人会の会合に自慢の料理を持ちこみ、そのつくり方を教えるオバタリアン。自分の子どもだけでなく近所の子どもたちともキャッチボールをする中年男など、それらの人々は無数に近く存在する。この種の資源の活用を相互に進める社会的な慣習をつくり出したいものである。生涯学習やその援助活動を、特定人の手から、すべての人々の行為として“無限に近く”拡大したいと念ずる。

要は、生涯学習というものを、ただの住民が行なう何でもない日常活動として考えたいのである。